Asahi KASEI

2019年7月16日

各位

旭化成建材株式会社

一「住宅の温熱性能と居住者の意識(熱中症に関する意識)」調査結果について一 住宅内で熱中症になったことがあると回答した人は10人に1人 発生場所は「寝室」が約28%で1位、次いで「居間・食堂」が約26% 年代が上がるほど熱中症に対する意識が低くなる傾向も

旭化成建材株式会社(本社:東京都千代田区、社長:堺 正光、以下「旭化成建材」) 快適空間研究所*1 は、できるだけ冷暖房設備にたよらない「あたたかい空間」での"心と体と懐があたたかくなるいきいきとした暮らし"を「あたたかい暮らし」と定め、その空間の普及のために情報発信、啓発活動を続けてきました。その活動の一環である「あたたかい暮らし研究会」*2では、首都大学東京 建築学域 須永研究室と共同で、「住宅の温熱性能と居住者の意識」について調査を実施しています。このたび、2018年8月に行った住宅内での熱中症に関する調査結果が判明しましたのでご報告いたします。

近年、地球温暖化や都市のヒートアイランド現象の影響により、新たな「災害」とまで言われる熱中症が 急増し、社会問題化しています。特に、昨年の夏は記録的な猛暑となり、夏の平均気温は東日本で+1.7℃ と 1946 年の統計開始以降で最も高くなり、熱中症による全国の救急搬送者数(5月~9月)は過去最多の 9万人以上でした。また、熱中症の発生場所別にみると、住居が 38,836人(40.3%)と最も多くなっている という事実があり、住宅内での熱中症対策は喫緊の課題です*3。

「あたたかい暮らし研究会」が行った調査では、住宅内で熱中症(疑いも含めて)になったと回答した人は10人に1人いるということ、住宅内で熱中症になった場所は、「寝室」が1位、次いで「居間・食堂」であること、高齢の人ほど熱中症に対する意識が低い傾向にあることなどがわかりました。

I. 調査結果のトピックス

【住宅内での熱中症の発生とその場所について】

- ・住宅内で熱中症(疑いも含めて)になったと回答した人は10人に1人。
- ・発生場所別にみると、「寝室」「居間・食堂」の順で、それぞれ3割近くに上る。
- ・温熱性能が高い住まいに暮らす人ほど、「寝室」「居間・食堂」で熱中症になったと回答した人は少なく、 寝室の温熱環境が快適になっている傾向にある。

【住宅内での熱中症に関する意識について】

- ・住宅内での熱中症を心配している人は半数以下、特に60代で心配している人が少ない。
- ・住宅内での熱中症の危険度を正しく認識している人は2割以下、さらに60代の認識は1割を切る。
- ・熱中症による救急搬送者数は高齢者(65歳以上)が多い一方で、年代が高くなるほど、熱中症(疑いも含めて)になったことがあると回答している人は少なく、実態と認識に大きな乖離がある。



Ⅱ. 調査概要

1. 調査目的:住まいの温熱環境の実態と、居住者の温熱環境に関する意識、行動、ライフスタイルや価値 観を調査することで、社会への情報発信および断熱事業におけるマーケティング活動の一 助とする。

2. 調査時期: 2018年8月30日~9月5日

3. 調査対象:全国6地域19都府県

首都圈(東京、埼玉、神奈川、千葉)、中京圈(岐阜、静岡、愛知、三重)、阪神圏(京都、大阪、兵庫、奈良)、山陽・四国(岡山、広島、香川、愛媛)、福岡県、宮崎県・鹿児島県

戸建持家居住者 20代~60代 既婚男女 (回答者数:1175名)

※回答者数はウェイトバック後の数値。回答者の性・年代・エリア別データを実際の人口構成比で、 データに重み付けをし、再集計するウェイトバック集計を行い補正した。

4. 調査方法:WEBアンケート調査

※温熱性能別の比較について

アンケートで住宅の断熱性能を回答してもらうのは難しいため、本調査では、住まいの温熱性能別の比較をするために、窓ガラスの種類について選択してもらい、その結果を分類し解析。温熱性能「低」:シングルガラス、温熱性能「中」:ペアガラス、温熱性能「高」:Low-Eペアガラスまたはトリプルガラスと回答した人。なお、この分類は、実際の住宅全体の断熱性能と高い相関があることが確認されています。

*参考: 食野遼 須永修通 大塚弘樹; 住宅の断熱性能とライフスタイルの関係に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)、pp1145-1146、2016.8



Ⅲ. 調査結果

1. 住宅内での熱中症の発生とその場所について

(1) 住宅内で熱中症(疑いも含めて)になったと回答した人は10人に1人

現在の住まいで、最近 2~3 年以内に、疑いも含めて熱中症になったことがあると回答した人は、10.7% となっています。10 人に 1 人もの人が熱中症になったことがあると回答していることになります。

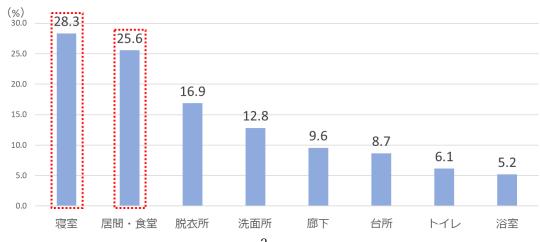
Q. あなたは、現在のお住まいで、最近2~3年以内に、 熱中症(疑いも含めて)になったことはありますか



(2) 発生場所別でみると、「寝室」「居間・食堂」の順で、それぞれ3割近くに上る

熱中症(疑いも含めて)になったことがあると回答した人のうち、住まいのどの場所で熱中症になったかについて聞いたところ、「寝室」「居間・食堂」が上位に上がりました。普段過ごす時間の長い場所で、熱中症になっている傾向にあることが確認できました。

Q. 熱中症(疑いも含めて)になったのは、お住まいのどの場所ですか(複数回答)



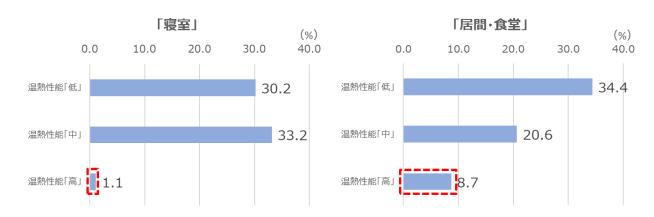


(3) 温熱性能が高い住まいに暮らす人ほど、「寝室」「居間・食堂」で熱中症(疑いも含めて)になったと回答した人の割合は少なく、寝室の温熱環境が快適になっている傾向に

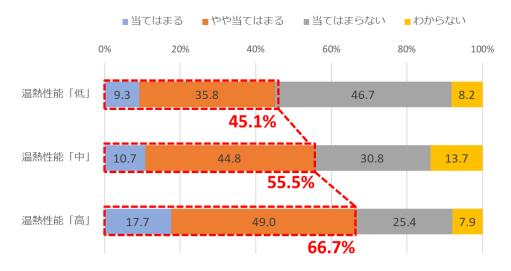
熱中症の発生場所の上位2つの場所について、住宅の温熱性能別に見てみると、温熱性能「低」「中」の 人の3割前後が「寝室」「居間・食堂」で熱中症になったと回答している一方、温熱性能が高い住まいに暮 らす人は、「寝室」や「居間・食堂」で熱中症になったと回答した人は少なくなっています。

また、温熱性能別に、寝室の温熱環境についてみてみると、温熱性能が高い住まいに暮らす人ほど、「今の住まいは寝るときの温熱環境が快適だ」(当てはまる+やや当てはまる)と回答した割合が高くなっており、これが熱中症の発生率低下につながっていると考えられます。

「寝室」「居間・食堂」で、熱中症(疑いも含めて)になったと回答した割合〈住宅の温熱性能別〉



Q. 夏、今の住まいは、寝る時の温熱環境が快適だ



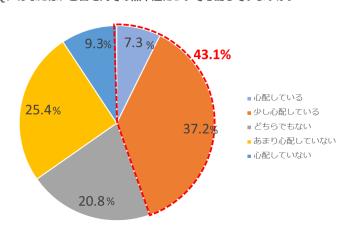


2. 住宅内での熱中症に関する意識について

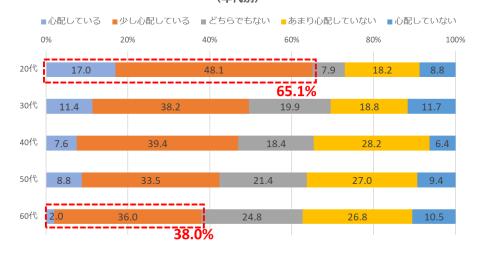
(1) 住宅内での熱中症を心配している人は半数以下、特に60代で心配している人が少ない

ご自宅内での熱中症について心配している(心配している+少し心配している)と回答した人は 43.1%と 半数以下です。年代別にみると、年代が上がるにつれて心配する割合は低くなり、20代で 65.1%に対して、 60代では 38.0%しか心配している人はいません。

Q. あなたは、ご自宅内での熱中症について心配していますか。



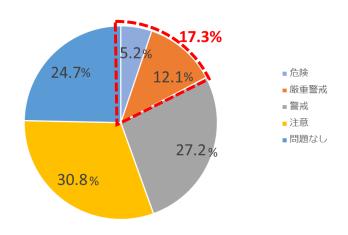
Q. あなたは、ご自宅内での熱中症について心配していますか 〈年代別〉



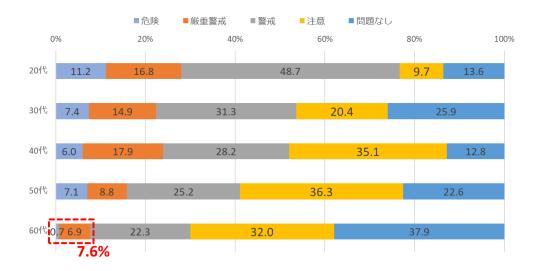


(2) 住宅内での熱中症の危険度を正しく認識している人は2割以下、さらに60代の認識は1割を切る ご自宅内での熱中症の危険度*4が最高どの程度まで上がる(上がっている)と思うかを聞いたところ、 「危険」「厳重警戒」になると回答した人は全体では17.3%、年代別にみると、60代は最も低く7.6%で す。一方、ある調査・研究*5によれば、一般的な住宅では、ほぼすべての物件において熱中症の危険度が 「厳重警戒」以上になるとの報告もあり、熱中症に対する認識と実態に乖離が生じていることがうかがえ る結果となっています。

Q. あなたは、ご自宅内での熱中症危険度が、 最高どの程度まで上がる(上がっている)と思いますか



Q. あなたは、ご自宅内での熱中症危険度が、 最高どの程度まで上がる(上がっている)と思いますか 〈年代別〉

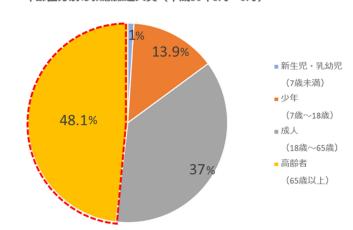




(3) 熱中症による救急搬送者数は高齢者(65歳以上)が多い一方で、年代が高くなるほど、熱中症(疑いも含めて)になったことがあると回答している人は少なく、実態と認識に大きな乖離

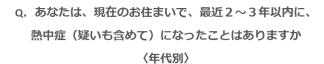
消防庁による、昨年(5月から9月)の熱中症による全国の救急搬送者数のデータを、年齢区分別にみると、高齢者(65歳以上)が最も多く48.1%となっています。

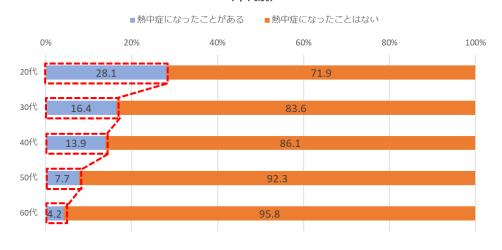
一方、今回の調査で、住宅内で熱中症(疑いも含めて)になったことがあると回答した人を年代別に見ると、年代が上がるほどその割合は低くなり、20代で28.1%に対して、60代では4.2%の人が熱中症になったことがあると回答しています。実際のデータと認識に、大きな乖離があることがわかりました。



年齢区分別の救急搬送人員(平成30年5月~9月)

出典:消防庁報道資料「平成30年(5月から9月)の熱中症による救急搬送状況」







Ⅳ. まとめ

熱中症を予防するために「空調設備や扇風機を上手に使うこと。高齢者は、暑さに対する感覚・調節機能が低下し、体内の水分が不足しがちになるため、熱中症にかかりやすく、特に注意が必要であるということ。 室内に温湿度計を置いてこまめにチェックすること」などの対策が、環境省などにより幅広く周知されています*6。

今回の調査からも、多くの人の住宅内での熱中症に対する意識が低く、熱中症になりやすいとされる高齢者ほど意識と実態が乖離していることがわかりました。そのため、私たちも「暑くないから大丈夫だと過信せず、小まめに温湿度を確認する必要があることや、誰もが手軽に行える対策として室内に温湿度計を置くこと」などを、高齢者を中心に、幅広く伝える活動を実施する予定です。

また、温熱性能が高い住まいの新たな生活価値として、就寝時の環境が快適で熱中症のリスクが低いことが分かりましたので、引き続き、住まいの温熱性能と居住者の生活価値に焦点をあてて調査研究を深掘りしていくとともに、住宅の高断熱化を促進するため、「温熱性能の高い住まい」での「あたたかい暮らし」の価値を多くの方に理解・共感して頂けるよう、幅広く情報発信をしてきたいと考えています。

*1 快適空間研究所

- 1) 名称:旭化成建材株式会社 快適空間研究所
- 2) 所在地:東京都千代田区神田神保町1丁目105番地神保町三井ビルディング
- 3) 設立: 2014年4月
- 4) 所長: 白石 真二
- 5) 目的:快適な空間を実現するための情報収集と分析及びそれらの結果を踏まえたコンセプト開発、マーケティング活動。
 - ① 一戸建の温熱環境と生活実態の把握による居住空間での温熱環境ニーズの発掘
 - ② 活動方針に共感いただける社外の関連企業、大学等の研究機関、行政、生活者等との共創
 - ③ 研究成果の社会や生活者への情報発信と断熱材事業へのフィードバック

*2 あたたかい暮らし研究会

- 1) 発足:2015年1月 快適空間研究所内に発足
- 2) 主な活動:あたたかく生き生きと暮らすための居住空間とライフスタイルの研究
 - ① 調査活動:住まいの温熱環境や生活者の暮らしに関するアンケート・訪問・実測調査等の実施
 - ② 啓発活動:生活者の温熱環境に関するリテラシー向上のためのセミナー、ワークショップ等の実施
 - ③ 情報発信活動:生活者に向けたHP、冊子等での情報発信など
- 3) 主なメンバー:

旭化成建材株式会社 快適空間研究所、株式会社旭リサーチセンター ハビトゥス研究所、 首都大学東京 建築学域 須永研究室、駒沢女子大学 住空間デザイン学類 橘田特任教授

- *3 平成30年の熱中症による救急搬送者数、発生場所について
 - (出典) 消防庁 報道資料「平成30年(5月から9月)の熱中症による救急搬送状況」



*4 熱中症の危険度について

「日常生活の熱中症予防指針」(日本生気象学会)では、熱中症に関連する湿度・気温・輻射熱を取り入れた暑さ指数 (WBGT)を用いて、熱中症の危険度を4段階の温度基準に分けています。「危険」(31℃以上)「厳重警戒」(28~31℃以上)は、すべての生活活動で熱中症が起こる可能性があるとされています。

*5 ある調査・研究について

京都府の一般的な住宅のWBGTの一日の最高数値は、「危険」レベルが 82%、「厳重警戒」レベル 18.0%になっている。(出典) 柴田祥江、北村恵理奈、松原斎樹「高齢者の夏期室内温熱環境実態と熱中症対策-体感温度の認知(見える化)による行動変容の可能性一」

*6 熱中症予防の対策について

(出典) 環境省 環境保健部環境安全課「熱中症 環境保健マニュアル 2018」

以上

【本件に関するお問い合わせ先】 旭化成株式会社 広報室 (関塚、片山、阿曽村) TEL 03-6699-3008